

福音書の「奇跡物語」のカテゴリーに関する一考察¹

大 宮 謙

1. はじめに²

新約聖書の福音書に記されている「奇跡物語」は、一般に「治癒奇跡」、「悪霊払い」、「自然奇跡」の三つのカテゴリーに大別される³。後述するように、「治癒奇跡」および「悪霊払い」という二つのカテゴリーについては、カテゴリー名とそこに含まれる「奇跡物語」の内容に特段の齟齬は認められない⁴。一方、「自然奇跡」については、一般に、このカテゴリーに含まれる「奇跡物語」を概観しただけでも、カテゴリー名が、そこに含まれる「奇跡物語」の内容を必ずしも十分に反映しているとは言い得ないように思われる。本論では、こうした問題意識に基づいて、新約聖書の福音書に記されている「奇跡物語」のカテゴリーについて考察を試みたい⁵。

2. 「奇跡物語」のカテゴリー

—「治癒奇跡」と「悪霊払い」の定義について—

既に述べたように、新約聖書の福音書に記されている「奇跡物語」は、一般

1 「福音書」は、本論では「新約聖書の四福音書」を指す。

2 本論では特に明示しない限り、聖書の引用は聖書協会共同訳に拠る。また、//は並行箇所を指す。

3 本論では「死者蘇生」は「治癒奇跡」に含める。「死者蘇生」はヤイロの娘（マコ5:21-43//）、やもめの息子（ルカ7:11-17）、ラザロ（ヨハ11:1-44）についてのエピソードが該当する。

4 本論「3-4 『奇跡物語』の分布」を参照。

5 引用箇所について、論者が語を補った部分は< >で明示する。

に三つのカテゴリーに大別される。そのうち、「治癒奇跡」と「悪霊払い」については、本論では、次のように定義することとしたい。まず、「悪霊払い」については、物語中に「悪霊ないし汚れた霊の追い出し」への言及があるものとする。こう定義し得るならば、「治癒奇跡」については、物語中に「悪霊ないし汚れた霊の追い出し」への言及を欠く「病の癒し」と定義し得よう。ただし、「悪霊払い」の物語として筋書きが進行しながら、結部でその人が「癒された」と記す場合も認め得る。したがって、「治癒奇跡」と「悪霊払い」の用語上の境界線は、それほど明瞭だとは必ずしも言い得ないであろう⁶。

3. それぞれのカテゴリーの一覧

前章で確認した「治癒奇跡」と「悪霊払い」についての本論での定義を踏まえた上で、各カテゴリーに該当するものを列挙すれば、次のようになろう⁷。なお、「自然奇跡」については、一般的に、このカテゴリーに含まれるものを列挙

6 このことは、特にマタイ福音書において妥当するようと思われる。例えば「イエスがお叱りになると、悪霊は出て行き、その時、子どもは癒やされた」（マタ17:18//）を参照。興味深いことに並行箇所のうちマコ9:14-29は、あくまで「悪霊払い」として描く。マタ4:24（//ルカ6:18、マルコは並行箇所を欠く）；8:16（並行箇所マコ1:34、ルカ4:40-41は境界線を保っているように思われる）；12:22（マルコ3:20-30の並行箇所は対応する表現を欠く。一方、ルカ11:14の方は境界線を保っているように思われる）；15:28（並行箇所マコ7:29-30は境界線を保っているように思われる。ルカは並行箇所を欠く）をも参照。さらに「十二人の派遣」（マタ10:1）においても、「汚れた霊に対する権能」が「汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いを癒すため」に授けられる（並行箇所マコ3:15は境界線を保っているように思われる。一方、ルカ6:12-16の並行箇所は対応する表現を欠く。）。

7 対象はイエスが行った奇跡に限る。すなわち、弟子が行った「治癒奇跡」、「悪霊払い」（マコ6:13//ルカ9:6、ルカ10:17）は除外する。また、イエスの身に起こった「聖霊による身ごもり」、「変容」、「復活」も除外する。さらに、「人々の不信仰のゆえに、そこではあまり奇跡をなさらなかった」（マタ13:58//マコ6:5）も除外する。なお、該当箇所の列挙にあたっては、マルコ版（および並行箇所）、それ以外のマタイ版（および並行箇所）、それ以外のルカ版、それ以外のヨハネ版の順とする。なお、「大勢の人の癒しと多くの悪霊の追い出し」（マコ1:32-34//マタ8:16-17//ルカ4:40-41）は内容的に「治癒奇跡」と「悪霊払い」が並立して記されているため、両方に重複して挙げた。

することとし、この時点では本論としての定義を提示せずにおくこととする。

3-1 治癒奇跡

- ①マコ 1:29-31//マタ 8:14-15//ルカ 4:38-39 シモンのしゅうとめの熱を癒す
- ②マコ 1:32-34//マタ 8:16-17//ルカ 4:40-41 大勢の人の癒しと多くの悪霊の追い出し⁸
- ③マコ 1:40-45//マタ 8:1-4//ルカ 5:12-16 規定の病を患っている人の清め
- ④マコ 2:1-12//マタ 9:1-8//ルカ 5:17-26 体の麻痺した人の癒し⁹
- ⑤マコ 3:1-6//マタ 12:9-14//ルカ 6:6-11 安息日の手の萎えた人の癒し
- ⑥マコ 5:21-43//マタ 9:18-26//ルカ 8:40-56 ヤイロの娘の死者蘇生、十二年間出血の止まらない女性の癒し¹⁰
- ⑦マコ 6:53-56//マタ 14:34-36 ゲネサレトでの病人の癒し
- ⑧マコ 7:31-37 ガリラヤ湖での耳が聞こえず口の利けない人の癒し
- ⑨マコ 8:22-26 ベトサイダでの盲人の癒し
- ⑩マコ 10:46-52//マタ 20:29-34//ルカ 18:35-43 盲人バルティマイの癒し¹¹
- ⑪マタ 4:23-25//ルカ 6:17-19 病気や痛み、悪霊に取りつかれた者などの癒し
- ⑫マタ 8:5-13//ルカ 7:1-10//ヨハ 4:46-54 百人隊長の子の癒し¹²
- ⑬マタ 9:27-31 二人の盲人の癒し
- ⑭マタ 9:35 ありとあらゆる病気や患いの癒し
- ⑮マタ 12:15-21 大勢の群衆の癒し
- ⑯マタ 14:14//ルカ 9:11 大勢の群衆の中の病人の癒し¹³
- ⑰マタ 15:29-31 足の不自由な人、目の見えない人、手の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人の癒し

8 註7を参照。

9 ルカ版のみ「他の病気の人々の癒し」(5:17)を含む。

10 マタイ版は、ヤイロでなく「一人の指導者」の娘。

11 マタイ版は「二人の盲人」、ルカ版は「ある盲人」。

12 ルカ版は「百人隊長の僕」、ヨハネ版は「王の役人の息子」。

13 マルコ版(6:30-34)、ヨハネ版(6:1-5)は「治癒奇跡」への言及を欠く。

⑮マタ19:1-2 大勢の群衆の癒し¹⁴

⑯マタ21:14 目の見えない人や足の不自由な人たちの癒し¹⁵

⑰ルカ7:11-17 やもめの息子の死者蘇生

⑱ルカ7:21 病氣や苦しみや悪霊に悩んでいる大勢の人、大勢の目の見えない人の癒し¹⁶

㉑ルカ14:1-6 水腫の人の癒し

㉓ルカ17:11-19 規定の病を患う十人の癒し¹⁷

㉕ルカ22:50-51 大祭司の僕の耳の癒し¹⁸

㉗ヨハ5:1-18 ベトザタ池での癒し

㉙ヨハ9:1-12 生まれつき目の見えない人の癒し

㉛ヨハ11:1-44 ラザロの死者蘇生

3-2 悪霊払い¹⁹

①マコ1:21-28//ルカ4:31-37 カファルナウムでの汚れた霊の追い出し

②マコ1:32-34//マタ8:16-17//ルカ4:40-41
大勢の人の癒しと多くの悪霊の追い出し²⁰

③マコ1:39 ガリラヤでの悪霊の追い出し²¹

④マコ5:1-20//マタ8:28-34//ルカ8:26-39
ゲラサ人の地方での汚れた霊に取りつかれた人からの追い出し²²

14 マルコ版（10:1）は「治癒奇跡」への言及を欠く。

15 マルコ版（11:15-19）、ルカ版（19:45-48）、ヨハネ版（2:13-22）は「治癒奇跡」への言及を欠く。

16 マタイ版（11:4-6）は「治癒奇跡」自体への直接の言及を欠く。

17 λεπρόςを聖書協会共同訳は「規定の病」と訳す。

18 マタ26:51//マコ14:47//ヨハ18:10は、「大祭司の僕」の耳が切り落とされたことに言及するが、「耳の癒し」はルカ版のみ。

19 マタ12:43-45//ルカ11:24-26は悪霊払い自体への直接の言及を欠くため除外する。

20 註7を参照。

21 ルカ版（4:44）は「悪霊払い」への言及を欠く。

22 マタイ版は「ガダラ人の地方での悪霊に取りつかれた二人」、ルカ版は「ゲラサ人の

- ⑤マコ7:24-30//マタ15:21-28 シリア・フェニキアの女の娘からの悪霊追い出し²³
- ⑥マコ9:14-29//マタ17:14-21//ルカ9:37-43 痙攣させる汚れた霊の息子からの追い出し²⁴
- ⑦マタ9:32-34 悪霊に取りつかれて口の利けない人からの悪霊追い出し
- ⑧マタ12:22-32//ルカ11:14-23 目が見えず口の利けない人からの悪霊追い出しとバルゼブル論争²⁵
- ⑨ルカ13:10-17 病の霊で腰の曲がった女の解放²⁶

3-3 自然奇跡²⁷

- ①マコ4:35-41//マタ8:23-27//ルカ8:22-25 嵐静め
- ②マコ6:30-44//マタ14:13-21//ルカ9:10-17//ヨハ6:1-14 5千人の給食²⁸
- ③マコ6:45-52//マタ14:22-33//ヨハ6:15-21 湖上歩行²⁹

地方での悪霊に取りつかれている男」。

23 マタイ版は「カナンの女の娘」。

24 マタイ版は「発作を起こさせる悪霊」、ルカ版は「痙攣させる悪霊／汚れた霊」。

25 ルカ版は「口を利けなくする悪霊」。マルコ版（3:20-30）は「バルゼブル論争」のみで悪霊払い自体への言及を欠く。

26 「霊の追い出し」への明確な言及を欠くが、「霊に取りつかれている女」（13:11）、「サタンに縛られていた」（13:16）と描写されていることから、「悪霊払い」に含める。

27 Hendrik Van der Loos, *The Miracles of Jesus*, NovTSup 9, Leiden, Brill, 1965, pp. 590-698, Graham H. Twelftree, "Nature Miracles and the Historical Jesus" in *The Nature Miracles of Jesus Problems, Perspective, and Prospects*, Eugene, Wipf and Stock, 2017, pp. 4-5も、これらの8つを挙げる。一方、John P. Meier, *A Marginal Jew Rethinking the Historical Jesus vol. II Mentor, Message, and Miracles*, New York, Doubleday, 1994, pp. 880は「神殿税論議の中での魚の口のコイン」を「奇跡物語」でないと解し除外する。確かに、ここにはイエスの指示の言葉があるだけで、奇跡自体（＝実際に獲れた魚がコインを加えていたこと）の記述を欠く。しかし、奇跡が後続することが少なくとも示唆されていると解し、本論では、このカテゴリーに含めて考察することとする。

28 ヨハネ6:15を「五千人の給食」に含める場合もあるが、共観福音書との並行関係から、ヨハネ6:15は「湖上歩行」の方に含める。

29 ヨハネ6:15については註28を参照。

- ④マコ8:1-10//マタ15:32-39 4千人の給食
- ⑤マタ17:24-27 神殿税論議の中での魚の口のコイン
- ⑥マコ11:12-14, 20-24//マタ21:18-22 枯れたイチジクの木
- ⑦ルカ5:1-11 大漁³⁰
- ⑧ヨハ2:1-11 水がワインに変わる

3-4 「奇跡物語」の分布

以上から、福音書における「奇跡物語」の事例は、「治癒奇跡」27、「悪霊払い」9、「自然奇跡」8と解し得る³¹。したがって、「治癒奇跡」が全体の6割強を占めるのに対し、「悪霊払い」と「自然奇跡」は、それぞれ全体の2割程度に留まる³²。

また、それぞれのカテゴリーで挙げた事例を一つ一つ確認すれば、「治癒奇跡」に含まれる「奇跡物語」には治癒への言及があり、「悪霊払い」に含まれる「奇跡物語」には悪霊ないし「汚れた霊」の追い出しについての言及があることを認め得る。したがって、「治癒奇跡」および「悪霊払い」については、カテゴリー名と「奇跡物語」の内容に特段の齟齬は認められないと言い得よう。一方、「自然奇跡」というカテゴリーで挙げた事例を一つ一つ確認すれば、カテゴリー名がそこに含まれる「奇跡物語」の内容を必ずしも十分に反映しているとは言い得ないように思われる。

そこで、次章では、まず、「自然奇跡」というカテゴリー名と、そこに含まれる「奇跡物語」の内容の関係について考察した上で、一般に、この「自然奇跡」というカテゴリーに含まれる「奇跡物語」の特徴について論じることとしたい。さらに、「自然奇跡」というカテゴリー名の適切性について考察を加えたい。

30 ヨハ21:1-15は復活後の物語のため除外する。

31 既に言及したように、「治癒奇跡」と「悪霊払い」で重複が1つある。したがって、27、9、8を足せば44であるが、重複を除けば総数は43である。註7を参照。

32 総数を44とすれば、「治癒奇跡」は、そのうちの27であるから61.4%、「悪霊払い」は、そのうちの9であるから20.5%、「自然奇跡」は、そのうちの8であるから18.2%である。

4. 「自然奇跡」というカテゴリー名について

福音書において「自然奇跡」というカテゴリーに含まれると解される「奇跡物語」は、前章で挙げた8つである。

4-1 「自然奇跡」というカテゴリー名と内容の関係

これらの「自然奇跡」を改めて個々に見ていけば、これらの「奇跡物語」を総称して「自然奇跡」と呼ぶことには、やや無理があると言わざるを得ないと思われる。というのも、これらの奇跡は、必ずしも「自然Nature」を対象とする奇跡ばかりとは言い得ないからである³³。

確かに「嵐静め」(①マコ4:35-41//)や「湖上歩行」(③マコ6:45-52//)は嵐や重力に抗する奇跡であるから、これを「自然奇跡」と呼んで差し支えないであろう³⁴。また、「魚の口のコイン」(⑤マタ17:24-27)、「大漁」(⑦ルカ5:1-11)、「枯れたイチジクの木」(⑥マコ11:12-14, 20-24//)は、魚や木という「自然」相手の奇跡だと解し得ないわけではない。

しかし、「五千人の給食」(②マコ6:30-44//)および「四千人の給食」(④マコ8:1-10//、両者を以下「パンや魚が増える奇跡」と表記)や「水がワインに変わる」(⑧ヨハ2:1-11)までをも、果たして「自然」相手の奇跡と言い得るかと問われれば、答えに詰まらざるを得ないであろう。もちろん、「パンや魚が増える奇跡」も(パンと共に)魚を相手にしてはいる。とは言え、こちらは既に獲った(おそらくは保存のための加工をも施した)魚であるから、増えた魚は「自然」に属する生き物というよりも、むしろ食品、あるいはパンやワインと同様に加工品に該当するであろう³⁵。

33 Meier, op. cit., pp. 874は「これら<「自然奇跡」>の物語の様式、言葉遣い、内容が非常に多様であるので、四福音書の中で『自然奇跡』が悪霊払い、癒し、死者蘇生のように単一の明解なカテゴリーを形成しているかどうか、正しくも疑問視するかもしれない」と指摘する(下線は論者による)。

34 ()内の丸数字は「3-3 自然奇跡」で付した番号を指す。以下も同じ。

35 A. E. J. Rawlinson, *The Gospel according to St. Mark Westminster Commentaries*,

そうすると、「自然奇跡」というカテゴリー名は、そこに含まれる「奇跡物語」の内容を包括的に指示するものとは、必ずしも言い得ないことになる。むしろ、実際には、福音書の「奇跡物語」全体の中で、「治癒奇跡」にも「悪霊払い」にも含まれないものについて、「その他の奇跡」と言う代わりに、便宜上、当てられた名称とも受け取り得るのではなかろうか。

このような状況の中、「自然奇跡」というカテゴリーに含まれる「奇跡物語」を内容に則して細分化する試みも提案されている³⁶。しかし、こうした試みの場合、そもそも「自然奇跡」の事例が8と少ないところで、さらに細分化する結果、各カテゴリーの該当例は極めて少なくなる³⁷。そうすると、わざわざ細分化しても、「自然奇跡」というカテゴリーに含まれる個々の「奇跡物語」に題を付す場合と、それほど大きな差異は認め得なくなるであろう。

4-2 「自然奇跡」物語の特徴

以上の考察から、「自然奇跡」というカテゴリー名は、そこに含まれる「奇跡物語」の内容を必ずしも包括したものではないことを確認した。そこで、今度は、本論で「自然奇跡」というカテゴリーに含めた8つの奇跡物語を一つの

London, Methuen & C. LTD., 1925, pp. 86-87、ヒュー・アンダーソン、三永旨従訳、『ニューセンチュリー聖書注解 マルコによる福音書』日本キリスト教団出版局、2011年、225頁を参照。

36 例えばGerd Theissen, *The Miracle Stories of the Early Christian Tradition* (translated by Francis McDonagh), Minneapolis, Fortress Press, 2007 (原著1974、英語版初版1983), pp. 94-112は「湖上歩行」を「顕現」、「嵐静め」を「救助奇跡」、「パンや魚が増える奇跡」、「水がワインに変わる」、「大漁」を「ギフト奇跡Gift Miracles」に、「神殿税論議の中での魚の口のコイン」を「規則に関する奇跡Rule Miracles」に分類する。なおTheissenの分類は、これらに「悪霊払い」、「治癒奇跡」を加えた6つである (*Ibid.*, pp. 85-94を参照)。これに対して、Twelftree, op. cit. (2017), p. 5は、あたかもTheissenが「自然奇跡」全体を「ギフト奇跡」と言い換える提案をしているかのように批判するが、妥当とは言い得ない。Gerd Theissen and Annette Merz, *The Historical Jesus A Comprehensive Guide*, Minneapolis, Fortress Press, 1998 (原著1996) pp. 294-95をも参照。

37 例えば、註36で挙げたTheissen, op. cit. (2007), pp. 94-112の場合、「顕現」、「救助奇跡」、「規則に関する奇跡」に含まれるのは、それぞれ1つずつである。Twelftree, op. cit. (2017), p. 5をも参照。

物語群として、これらを包括し得る新たなカテゴリー名を探求することとした。
い。

そのために、まずは、これらの物語群の特徴となり得る候補を挙げることに
する。主には以下の7つが候補となろう³⁸。

- 1) 「悪霊払い」や「治癒奇跡」は他の人々も行なう一方、「自然奇跡」はイエスのみに関連付けられる³⁹。
- 2) 相当数の奇跡で居合わせたのは弟子たちのみであり、群衆などが居合わせた場合でも、奇跡に気付いたのは弟子たちのみで、群衆などは必ずしも奇跡だとは気付いていない⁴⁰。
- 3) 福音書の「悪霊払い」や「治癒奇跡」の信頼に足る類例が歴史的にも、

38 これらの7つの候補のうち、1)はEric Eve, *The Healer from Nazareth Jesus's miracles in historical context*, London, SPCK, 2009, p. 114、2)～7)はTwelftree, op. cit. (2017), pp. 6-7に拠る。なお、*Ibid.*, pp. 6-7は「自然奇跡」の特徴にa)～h)の8点を挙げるが、a)、b)は本論では候補から除外する。ここで、a)は福音書の他の奇跡物語が人間の健康上の必要を満たす一方、「自然奇跡」は一般的に自然環境の驚くべき変化であり、あったとしても間接的に人間の必要性を満たす、b)はいくつかの物語では他では知り得ないイエスの性質が認められる、である。本論で両者を除外するのは、私見ではa)にもb)にも明らかに例外があり、さらにb)は文脈を逸脱して「誘惑」や「しるし」とイエスの「自然奇跡」を関連付けるからである。

39 Eve, op. cit. (2009), p. 114がマルコ福音書についての考察でこう指摘する。さらに、「イエスは弟子たちに悪霊を追いつく権威を与え、彼らは癒してもいるが、湖上を歩いたり、嵐を静めるような離れ業<を行う力>は譲渡不能であるように思われる」と付言する。

40 弟子たちのみが居合わせたのは「嵐静め」、「湖上歩行」、「神殿税論議の中での魚の口のコイン」(ただし奇跡自体の描写は欠く)、「枯れたイチジクの木」、「大漁」の5つ、群衆なども居合わせたのは「パンや魚が増える奇跡」、「水がワインに変わる」の3つである。Twelftree, op. cit. (2017), pp. 6-7 特徴 e)を参照。ただし、Twelftreeは例外として、「パンの奇跡」で群衆がそれを「しるし」と見ることへの言及(ヨハネ6:14)を指摘する。なお、「水がワインに変わる」で弟子が奇跡だと気付いたと解し得る論拠に、*Ibid.*, p. 7 n. 37は、物語の描写からは確かに弟子が奇跡に気付いたことを認め得ないが、末尾に「それで、弟子たちはイエスを信じた」(2:11)と記す点を挙げる。Barry L. Blackburn, "The Miracles of Jesus" in *Studying the Historical Jesus Evaluations of the State of Current Research* (ed. By Bruce Chilton and Craig A. Evans), Leiden, Brill, 1994, p. 370をも参照。

現代的にも多く認められる一方、「自然奇跡」の類例は歴史的にも、現代的にも比較的稀である⁴¹。

- 4) イエスの活動に関する福音書の「まとめ章句」（マコ3:7-12; 6:56//、マタ9:35; 15:29-31）は、「治癒奇跡」、「悪霊払い」には言及するものの、「自然奇跡」への言及を欠く⁴²。「まとめ章句」以外でも、「パンや魚が増える奇跡」への言及（マタ16:5-12//マコ8:14-21）を除き、福音書では「自然奇跡」が他の箇所で言及されることは全くない⁴³。
- 5) 「自然奇跡」を行う際のイエスの「方法やテクニク」については何も言及が無い⁴⁴。
- 6) 他の「奇跡物語」と比して、「自然奇跡」は旧約聖書モチーフの残響が相当に強く、また初代教会の神学および実践と関連する⁴⁵。

41 Twelftree, op. cit. (2017), p. 7 特徴 g) を参照。そこでは参照箇所として前者に Craig S. Keener, *Miracles The Credibility of the New Testament Accounts volume 1*, Grand Rapids, Baker Academic, pp. 508-79、後者に *Ibid.*, pp. 579-99、Theissen, op. cit. (2007), pp. 105-6 を挙げる。ただし Theissen は「ギフト奇跡」（註36参照）について論じており、「治癒奇跡、悪霊払い、救助奇跡などの場合には類似の経験やその行為者である悪霊払い師や医者の手順から身振りやテクニクを学ぶことができるが、ギフト奇跡の場合は、そのような類例がない」（論者の意識）と述べる。なお、Keener の *Miracles The Credibility of the New Testament Accounts* は2巻本で1172頁に及ぶ大著である。

42 この点について Eve, op. cit. (2009), p. 114 は、「治癒奇跡」と「悪霊払い」が「イエスの活動に」典型的である一方、「自然奇跡」は「例外的」と述べる。なお、ここで「まとめ章句」に挙げるマコ3:7-12は、人々が「押し寄せてきた」理由として、奇跡（この場合は「治癒奇跡」）に言及するものであるため、本論「3-1 治癒奇跡」のリストからは除外した。

43 Twelftree, op. cit. (2017), p. 6 特徴 c) を参照。Blackburn, op. cit., p. 370 は「自然奇跡」が弟子のみに示されたことを「『自然奇跡』がイエスの公的活動の一翼を担うものとしては知られていなかったことを少なくとも示唆する」と指摘する。

44 Twelftree, op. cit. (2017), p. 6 特徴 d) を参照。Twelftree は、「方法やテクニク」から除外するものとして、例えば、水がめに水をいれる指示（ヨハ2:7）、パンや魚を手にしての祈り（マコ6:41//、マコ8:6//）を挙げる。Meier, op. cit., p. 876 も、パンや魚を手にしての祈りを「ユダヤの厳粛な食事の際の卓主の通常の行為」だと述べる。

45 Twelftree, op. cit. (2017), p. 7 特徴 f) を参照。*Ibid.*, p. 7 n. 39 は参照箇所として Blackburn, op. cit., pp. 370-71 を挙げるが、*Ibid.*, p. 371 n.77, 78 が明瞭に示すように、ここで

- 7) 一般的に、「自然奇跡」は相手からの要請、嘆願に応える形でなく、イエスによって自発的、ないし主導的に行われる⁴⁶。

4-2-1 「自然奇跡」物語の特徴 一候補から除外されるもの その1—

これらの7つの候補の中で、私見では、5)～7)は必ずしも「自然奇跡」の特徴とまでは言い得ないと思われる。具体的な論拠は次のとおりである。

まず、5)の「方法やテクニク」への言及を欠くのは、必ずしも「自然奇跡」に限定されず、「治癒奇跡」や「悪霊払い」にも少なくない事例が認められる。確かに、①「静まれ、この人から出て行け」と叱る(マコ1:25//)⁴⁷、②手で触れて「私は、望む。清くなれ。」と言う(マコ1:41//)、③「汚れた霊、この人から出て行け」と言う(マコ5:8)、④「ものを言わせず、耳も聞こえさせない霊、私の命令だ。この子から出て行け。二度と入って来るな。」と叱る(マコ9:25)、⑤指を両耳に差し入れ、唾を付けて舌に触れ、天を仰いで「エッフアタ」と言う(マコ7:33-34)、⑥両目に唾をつけ、両手をその人の上に置き、さらに再び両手を目に当てる(マコ8:23-25)、⑦唾で土をこねてその人の目に塗り、「シロアムの池に行って洗いなさい」と言う(ヨハ9:6-7)の7例、特に⑤～⑦は、明瞭に「方法やテクニク」と言い得るであろう⁴⁸。

しかし、数から言えば、「治癒奇跡」27、「悪霊払い」9、合わせて36の内の7例に留まり⁴⁹、全体の傾向を反映しているとは言い難い⁵⁰。しかも、①「静ま

Blackburnは「自然奇跡」だけでなく「死者蘇生」をも考察対象に含めて論じる。

46 Twelftree, op. cit. (2017), p. 7 特徴 h) を参照。

47 ギリシア語はφιμώθητι καὶ ἐξέλθε ἐξ αὐτοῦ(直訳「静まれ、彼から出て行け」)であるので、聖書協会共同訳「黙れ、この人から出て行け」から論者が変更した。

48 子どもの手を取って、「タリタ、クム」と言う(マコ5:41)も一見「方法やテクニク」に見えるが、意味は「少女よ、さあ、起きなさい」であるから、場面における自然な描写や発語と解し得るので除外する。

49 既述の通り、「大勢の人の癒しと多くの悪霊の追い出し」(マコ1:32-34 //) は内容的に「治癒奇跡」と「悪霊払い」の両方に重複して挙げているので、厳密には35のうちの7例となる。註7を参照。

50 しかも、マコ5:8の並行箇所では「行け」(マタ8:32)、「イエスはお許しになった」(ル

れ、この人から出て行け」と叱る（マコ1:25//）は、文言上、嵐を静める際のイエスの言葉（マコ4:39）との関連性を指摘し得る⁵¹。従って①は、確かに「悪霊払い」における「方法やテクニック」の事例に数え得るが、そうであれば、「自然奇跡」においても「方法やテクニック」に数え得る事例があることをも間接的に示すことになろう⁵²。

また「手を取って起こす」（マコ1:31）、「起きて床を担ぎ、家に帰りなさい」（マコ2:11）、「手を伸ばしなさい」（マコ3:5）などは、場面における自然な描写や発語と解し得るので、「方法やテクニック」とまでは言い得ないと思われる⁵³。単に「癒された」、「悪霊を追い出した」と記されている場合も少なくない⁵⁴。さらには、イエスの「悪霊払い」に対して「ベルゼブルの力による」という言い掛かりがつけられる背景としては、イエスの「悪霊払い」が必ずしも「方法やテクニック」ないしは「力の出どころ」を明らかにせずに行われたことを挙げ得よう⁵⁵。

以上の考察から、「方法やテクニック」への言及を欠くことは、「治癒奇跡」や「悪霊払い」にも少なくない事例を認め得ることであり、「自然奇跡」の特徴とまでは言い得ないであろう。

一方で、「自然奇跡」の中に、「奇跡を起こす言葉や行為を欠くものがある」

カ8:32）と記され、「方法やテクニック」は保持されていない。マコ9:25の並行箇所（マタ17:18、ルカ9:42）も同様。

51 Meier, op. cit., p. 1006 n. 167は、「マルコ福音書において、＜『叱る』と『静まれ』の＞二語が一つの文章と一緒に現われるのは、マルコの最初の悪霊払い物語（1:21-28）と『嵐静め』だけ」と指摘する。

52 なお、「五千人の給食」でのイエスの言葉φέρτε μοι ὧδε αὐτούς「それらをここに私のところに持って来なさい」（マタ14:18）と「痙攣させる汚れた霊の息子からの追い出し」でのイエスの言葉φέρτε μοι αὐτὸν ὧδε「彼をここに私のところに連れて来なさい」（マタ17:17）には、興味深いことに、文言上の一致（代名詞の単数、複数の違いを除く）を認め得る。

53 ルカ7:14、ヨハ5:8、11:43も同様に解し得よう。

54 マコ1:34//、39; 7:30//、マタ9:33, 35; 12:15, 22//; 19:2; 21:14、ルカ7:21; 14:4。

55 Graham H. Twelftree, *Jesus the Exorcist A Contribution to the Study of the Historical Jesus*, Tübingen, Mohr Siebeck, 1993, pp. 159-63、特にpp. 160-161を参照。

という指摘には首肯し得る点がある⁵⁶。ただ、治癒奇跡や悪霊払いにも、「奇跡を起こす言葉や行為を欠くもの」を認め得ることも確かであるため、これも「自然奇跡」独自の特徴とまでは言い得ないであろう⁵⁷。

4-2-2 「自然奇跡」物語の特徴 一候補から除外されるもの その2—

次に、「6) 他の『奇跡物語』と比して、『自然奇跡』は旧約聖書モティーフの残響が相当に強く、また初代教会の神学および実践と関連する」という点についてであるが、この特徴が他の「奇跡物語」と比して「自然奇跡」に突出して認められるとは、必ずしも言い得ないと思われる。

確かに、「パンや魚が増える奇跡」、「嵐静め」、「湖上歩行」、「枯れたイチジクの木」には「旧約聖書モティーフの残響」を認め得るであろう⁵⁸。しかし、「自然奇跡」に挙げられる残りの「奇跡物語」である「神殿税論議の中での魚の口のコイン」、「大漁」、「水がワインに変わる」には、相当に強い「旧約聖書モティーフの残響」を認めることは困難ではなかろうか⁵⁹。

さらに、例えばイザヤ書の用例（死者蘇生について26:19、治癒奇跡について29:18; 35:5-6; 42:7）を勘案すれば、少なくとも「死者蘇生」や「治癒奇跡」にも旧約聖書モティーフの残響は十分に認め得ると思われる⁶⁰。

一方、「初代教会の神学および実践との関連」についても、使徒言行録の事

56 Meier, op. cit., p. 876は、「パンや魚が増える奇跡」、「湖上歩行」を例示する。確かにイエスは「パンや魚よ、増えよ」とは言わず、「私に水の上を歩かせよ」とも言わない。

57 事例については註54を参照。

58 例えば、「パンや魚が増える奇跡」については出16章、王下4:42-44、「嵐静め」については詩107:25-29、ヨナ1章、「湖上歩行」については出3:14、34:6、ヨブ9:8（特にLXX）、「枯れたイチジクの木」についてはエレ8:13を挙げ得よう。Blackburn, op. cit., p.371, n. 77をも参照。

59 例えば、*Ibid.*, p.371, n. 77は、「水がワインに変わる」（ヨハ2:1-11）の参照箇所にはイザヤ25:6を挙げる。しかし、私見では、当該箇所は「主の山の祝宴」に「ぶどう酒が供される」ことを述べるのみで、「水からぶどう酒への変化」は示唆さえされていない。

60 「悪霊払い」についても、例えばサム上16:14-23を挙げ得よう。

例を踏まえれば⁶¹、少なくとも「治癒奇跡」が初代教会の「実践」において中心的な位置を（たとえ排他的ではなくとも）占めていたと解し得る。

以上の考察から、「旧約聖書モチーフの残響」や「初代教会の神学および実践との関連」は、「他の奇跡物語」に比して、「自然奇跡」に突出した特徴とまでは言い得ないであろう。

4-2-3 「自然奇跡」物語の特徴 ―候補から除外されるもの その3―

さらに、「7）全般的に、『自然奇跡』は相手からの要請、嘆願に応える形ではなく、イエスによって自発的、ないし主導的に行われる」という点についても、必ずしも「自然奇跡」固有の特徴とは言い得ないと思われる。

最も明瞭な反例としては、「嵐静め」での弟子たちの嘆願を挙げ得よう⁶²。また、「水がワインに変わる」での母マリアの指摘は、たとえ直接的とはいい得なくとも、要請に近いものだと解し得よう⁶³。さらに、「治癒奇跡」および「悪霊払い」においてもイエスが主導していることを指摘する者もある⁶⁴。

以上の考察から、「『自然奇跡』は相手からの要請、嘆願に応える形でなく、イエスによって自発的、ないし主導的に行われる」という点も、必ずしも「自然奇跡」固有の特徴とは言い得ないであろう。

4-2-4 「自然奇跡」物語の特徴 ―一定の留保が必要なもの その1―

なお、「3）福音書の『悪霊払い』や『治癒奇跡』の信頼に足る類例が歴史的にも、現代的にも多く認められる一方、『自然奇跡』の類例は歴史的にも、現代的にも比較的稀である」という点についても一言しておきたい。既に確認

61 事例については註66を参照。

62 マコ4:38//マタ8:25//ルカ8:24。

63 母マリアのイエスに対する発言「ぶどう酒がありません」（ヨハ2:3）。

64 Twelftree, op. cit. (2017), p. 5およびn. 21。なおTwelftreeは、反例に論者と同様に「水がワインに変わる」、「嵐静め」を挙げる。それでも不思議なことに、*Ibid.*, p. 7は、「自然奇跡」の特徴の一つとして、「『自然奇跡』が、イエスによって自発的、ないし主導的に行われる」点をなお挙げる。

したように、そもそも四福音書において、「自然奇跡」の事例は、「悪霊払い」と共に、「治癒奇跡」に比して「比較的稀」である⁶⁵。使徒言行録においても、この傾向は変わらないと解し得よう⁶⁶。さらに、たとえ歴史的、現代的な類例が、「悪霊払い」や「治癒奇跡」に対して確かに「比較的稀」ではあっても、現代に至るまでの「自然奇跡」についての報告事例が希少と言うほどには少なくはないことも確かである⁶⁷。

従って、福音書の『自然奇跡』の類例が歴史的にも、現代的にも比較的稀である点を積極的に「自然奇跡」の中心的な特徴と位置付けるには一定の留保が必要であらう。

4-2-5 「自然奇跡」物語の特徴 — 一定の留保が必要なもの その2—

さらに、4)で「まとめ章句」(マコ3:7-12; 6:56//、マタ9:35; 15:29-31)が「治癒奇跡」、「悪霊払い」には言及するものの「自然奇跡」への言及を欠くという点についても一言しておきたい。確かに指摘される点は認められるものの、なお議論の余地はあると思われる。と言うのも、第一にマルコ福音書における最初の「自然奇跡」は4:35-41の「嵐静め」であるから、最初の「まとめ章句」である3:7-12に「自然奇跡」への言及を欠くのは当然である。第二にマコ6:56//、マタ15:29-31も「人々が癒しを求めて集まって来た」ことに言及す

65 註32を参照。

66 使徒言行録における「治癒奇跡」(死者蘇生を含む)は、①3:1-10、②5:15-16、③8:7、④9:17-18、⑤9:32-35、⑥9:36-43、⑦14:8-10、⑧19:11-12、⑨20:7-12、⑩28:1-10(「しるし」に関連する2:43、5:12、8:6、13、14:3の言及は除く)の10例、「悪霊払い」は、①5:15-16、②8:7、③16:16-18、④19:11-12の4例(ただし、5:15-16、8:7、19:11-12の3例は内容から「治癒奇跡」と「悪霊払い」の両方に数えた)である一方、「自然奇跡」は①5:17-26、②12:1-11、③16:19-34の3例である(ただし、いずれも「牢獄からの解放」の奇跡であり、私見では、これらを「自然奇跡」と呼ぶことには躊躇いが残る)。一方、Twelftree, op. cit. (2017), p. 4 n. 14はこれらの奇跡と福音書の「自然奇跡」に共通の特徴を見る。なお、12:20-23(主の天使がヘロデを打つ)、13:8-12(魔術師が視力を奪われる)は、いずれのカテゴリーにも含めなかった。

67 Keener, op. cit. (2011), pp. 579-99を参照。

るものであるから、そもそもこれを「まとめ章句」と呼ぶことが適切であるのか、少なくとも検討の余地はあろう。第三にマタ9:35についても、この箇所以前の「自然奇跡」はマタ8:23-27の「嵐静め」の一例のみであるから、「町や村」(9:35)でイエスが行ったことの中に「自然奇跡」を一般化して含めないことは、必ずしも不自然とは言えないであろう。従って、「まとめ章句」が「自然奇跡」への言及を欠く点についても、これを積極的に「自然奇跡」の中心的な特徴と位置付けることには一定の留保が必要であろう。

4-2-6 「自然奇跡」物語の特徴 ―考察の結果―

以上の考察から、「自然奇跡」物語の特徴を簡略化して列挙すれば、以下の4点となる。

- 1) 「悪霊払い」や「治癒奇跡」は他の人々も行なう一方、「自然奇跡」はイエスのみに関連付けられる。
- 2) 「自然奇跡」に気付いたのは、ほぼ弟子たちのみであり、群衆などは居合わせたとしても奇跡だとは気付いていない。
- 3) 「悪霊払い」や「治癒奇跡」の類例が歴史的にも、現代的にも多く認められる一方、「自然奇跡」の類例は比較的稀である。
- 4) 福音書の「まとめ章句」は「自然奇跡」への言及を欠き、それ以外の箇所でも、「パンや魚が増える奇跡」にわずかに言及するのみである。

これらの4つの特徴のうち、3)「自然奇跡」の類例が歴史的にも現代的にも比較的稀であること、4) 福音書の「まとめ章句」は「自然奇跡」への言及を欠き、それ以外の箇所でも「自然奇跡」への言及が極めて少ないこと、これらは、既に見た通り、積極的に「自然奇跡」の中心的な特徴と位置付けるには一定の留保が必要である。しかも、両者とも「自然奇跡」が「何であるのか」という肯定的な指摘でなく、「何でないのか」という否定的な指摘である。そのため、この2つの特徴は、「自然奇跡」の中心的な特徴と言うよりは、むしろ

付随的、周辺的な特徴と解すべきであろう。そうすると、「自然奇跡」の特徴として中心的に提示し得ることは、1)の「自然奇跡」はイエスのみに関連付けられること、2)の「自然奇跡」に気付いたのは、ほぼ弟子たちのみであること、の両者になろう。従って、この2つをまとめて言えば、「自然奇跡」の特徴として主に言い得ることは、「この奇跡がイエスのみに関連付けられ、しかも、この奇跡に気付いたのは、ほぼ弟子たちのみであること」ということになろう⁶⁸。ただし、この特徴は、必ずしも内容的な特徴とは言い得ない。対照的に、「治癒奇跡」は治癒についての言及があるという内容的な特徴を持ち、また、「悪霊払い」も悪霊ないし「汚れた霊」の追い出しについての言及があるという内容的な特徴を持つと言い得よう。

一方、「自然奇跡」の特徴として「特別なキリスト論的意義」を挙げる学者もいる⁶⁹。この学者に拠れば、他の奇跡にもキリスト論的意義を認め得るが、「治癒奇跡」や「悪霊払い」が「イエスの権威」についての問いを提起する一方⁷⁰、「自然奇跡」が「イエスの出自 identity」という問いを提起する点に、「特別さ」を看取し得るという⁷¹。すなわち、「自然奇跡はイエスの使命よりも人格により焦点を当てている」というのである⁷²。

この学者がマルコ福音書における「治癒奇跡」および「悪霊払い」の取り扱い

68 「自然奇跡」がイエスのみに関連付けられると指摘したEve（註38参照）は、Eve, op. cit. (2009), p. 99で「風と湖<の嵐>を一言命じて静めることのできる方は、単なる癒し手や悪霊払い師ではない。と言うのも、ここに旧約聖書で神自身にのみ帰すこと<偉大な業>を行う方がいるからだ」と述べる。

69 *Ibid.*, pp. 113-14は、「枯れたイチジクの木」を除く全ての「自然奇跡」にこの特徴を認める。また、マルコにおいて「治癒奇跡」および「悪霊払い」が「自然奇跡」とは著しく異なる仕方では取り扱われていると論じる。

70 *Ibid.*, p. 114はマコ1:27; 2:10を例示する。

71 *Ibid.*, p.113はJohn Paul Heil, *Jesus Walking on the Sea Meaning and Gospel Functions of Matt 14:22-33, Mark 6:45-52 and John 6:15b-21*, Rome, Biblical Institute Press, 1981, pp. 124-25を参照箇所挙げつつ、「嵐静め」で初めて「イエスの出自」が問われたと指摘する。一方で、既にEve, op. cit. (2009), pp. 95-96では、権威と出自の密接な関係を認めている。私見では、少なくともイエスの場合には、出自が権威を生み出していると言い得よう。

72 *Ibid.*, p. 114。もっともEve自身、これは「すっかり明瞭というのとは程遠い」と評す。

われ方が、「自然奇跡」とは異なることを論証しようとして挙げる証拠の中には、確かに注目すべきものも含まれる⁷³。しかし、本人が認めるように、「決定的な一つの証拠」があるわけではなく、間接的な証拠の積み重ねによる論証という方法を探る中で、必ずしもその論証はすっかり説得的であるとは言い得ないと思われる。例えば、論証の中で「治癒奇跡」および「悪霊払い」はマルコ福音書の筋書きを進めることに貢献する一方、「自然奇跡」はそうではないと指摘する⁷⁴。しかし、マルコ福音書において「舟」がストーリー展開において果たす役割を鑑みれば、「舟」に関連して語られている「嵐静め」や「湖上歩行」がストーリー展開において果たす役割をも認めざるを得ないであろう⁷⁵。さらに、私見では、特にマルコ福音書では、「嵐静め」における「一体この方はどなたなのだろう」(4:41)という問いに対する答えとして「湖上歩行」における「安心なさい。私だ。恐れることはない」(6:50)というイエスの言葉を受け止め得ると思われる。そうであれば、この対応関係にマルコ福音書のストーリー展開における構造上の大切な働きを認め得ると思われる。

4-3 「自然奇跡」物語の包括的な特徴とカテゴリー名を付すことの可否

ここまでの議論を踏まえて、改めて既に挙げた一般に「自然奇跡」というカテゴリーに含まれる8つの「奇跡物語」(「嵐静め」、「5千人の給食」、「湖上歩行」、「4千人の給食」、「神殿税論議の中での魚の口のコイン」、「枯れたイチジクの木」、「大漁」、「水がワインに変わる」)を観察するならば、その包括的特徴としては、『人間および人間に付着するもの』以外を対象とする奇跡」とい

73 既に「自然奇跡」の特徴に挙げた「1）『悪霊払い』や『治癒奇跡』は他の人々も行なう一方、『自然奇跡』はイエスのみに関連付けられる。」はその典型である。

74 *Ibid.*, pp. 114-15。どうやらEveは「イエスの評判が上がることで、イエスへの反対が高まること」を物差しにしているようである。

75 興味深いことに、*Ibid.*, p. 96は「舟で湖を頻回に渡ることがこの部分<マコ4:1-8:26>を一纏まりにしている。」と述べる。果たしてEveは福音書の構成要素として重要な「舟」に関連する「自然奇跡」と「筋書き」との関係をどう理解しているのであろうか。

うことになろう⁷⁶。ここで「人間に付着するもの」とは、悪霊を念頭に置いた表現であるが、あるいは病気をも含め得るかもしれない。

それにしても、「『人間および人間に付着するもの』以外を対象とする奇跡」という表現は、いかにも冗長ではある。しかし、「非人間的奇跡」と言うとは別のニュアンスに容易に受け取られ得るから、ここでは暫定的に、敢えてこの冗長な表現を採用したい⁷⁷。もちろん、より適切な表現があれば、それを採用することを拒むものではない。

一方で、包括的特徴が「『人間および人間に付着するもの』以外を対象とする奇跡」といったものでしかないものを、そもそも一つのカテゴリーとして認めるべきであるかという点については、かなり否定的な回答に傾かざるを得ないように思われる⁷⁸。

76 Keener, op. cit. (2011), p. 509は「人間以外<が対象の>自然奇跡」という表現を用いる。Eve, op. cit. (2009), p. 145は「『自然奇跡』は悪霊払いや癒しを含まないイエスの奇跡を指す伝統的な用語である。」と述べる。一方、Meier, op. cit., p. 875は「『自然奇跡』を定義する一つの一般的な仕方」である「無生物を変化させる奇跡行為者の力ないし能力を詳述するもの」に対して、これを妥当でないと批判する。論拠は、それが「一つには死体という無生物の蘇生を<自然奇跡に>含むことになり、もう一つには湖上歩行がガリラヤ湖の水質<＝無生物>でなくイエスの身体能力を変化させるものである」ことを挙げる。もし「湖上歩行」をMeierのように「イエスの身体能力を変化させるもの」と解すならば、「自然奇跡」の包括的特徴としてここに提案している「『人間ないし人間に付着するもの』以外を対象とする奇跡」は、再考を迫られることになろう。一方、「湖上歩行」を「重力」ないし「場」の変化と解し得るのであれば、ここで提案している包括的特徴は、なお有効と言い得るであろう。

77 「自然奇跡」というカテゴリー名についてTwelftree, op. cit. (2017), p. 5は、これらの奇跡に対する適切な表現が見当たらないと認めた上で、なお、これらの奇跡を特定するための利便性から、「より良い用語が提案されるまで」は敢えて「自然奇跡」という呼称を採る判断をする。

78 Meier, op. cit., p. 877は「『自然奇跡』を単一のカテゴリーとして定義することは、詳細に調べてみると実際的でなく支持し得ないと分かる」と述べる。

5 「自然奇跡」の歴史的信頼性

さて、「自然奇跡」について更に論じるべき重要な点は、「治癒奇跡」や「悪霊払い」に比して、「自然奇跡」の歴史的信頼性が疑問視ないし否定されがちであることである⁷⁹。既に「自然奇跡」の特徴の候補の中から最終的に残った4つのうちの3つ、すなわち、目撃者が弟子たちにはば限られ、福音書の中で言及されることも少なく、聖書外の類例も現代に至るまで限られていることが、主な論拠とされる⁸⁰。

こうした立場に基づいて、「自然奇跡」は「治癒奇跡」や「悪霊払い」によって明らかとなったイエスの奇跡を行なう力を、伝承過程ないし福音書執筆の段階で、「自然」に対してさえ及ぶものへと拡張し、そのことによってイエス自身を神の子に相応しいものへと「格上げ」する目的で後書き加えられたものだと言われることも少なくない⁸¹。

このような理解に立てば、「自然奇跡」は「『人間および人間に付着するもの』以外を対象とする奇跡」であるばかりか、「イエスが実際に行っていないにもかかわらず、後付けでイエスに帰された奇跡」ということになる⁸²。

79 Twelftree, op. cit. (2017), p. 7, Keener, op. cit. (2011), p. 579, Eric Eve, “The Growth of the Nature Miracles” in *The Nature Miracles of Jesus Problems, Perspective, and Prospects*, Eugene, Wipf and Stock, 2017, p. 66を参照。なお、「自然奇跡」に関する福音書から現代に至る解釈史についてはTwelftree, op. cit. (2017), pp. 8-35を参照。Eve, op. cit. (2009), p. xvは「一見したところ、奇跡物語は正にその性質から相当に非日常的か不可能に見える出来事であるのに、そのような出来事の歴史的蓋然性historical plausibilityをどのように評価し得るか」と問う。

80 本論「4-2-6 『自然奇跡』物語の特徴 ―考察の結果―」を参照。

81 具体例については後述する。

82 既に触れたように、*Ibid.*, pp. 113-16は、マルコ福音書における「自然奇跡」の取り扱い方が、「治癒奇跡」および「悪霊払い」とは異なることを論証しようと試みるが、私見では、それは、イエスの奇跡全体が歴史性を疑われ、否定されることを避けるために、「自然奇跡」を切り分けようとしているようにも思われる。言わば、それは「自然奇跡」を犠牲にして、「治癒奇跡」、「悪霊払い」の歴史性を救おうする試みであるかのようにも思われる。

少なくない学者が、この立場を取る。例えば、奇跡物語の網羅的かつ詳細な研究を著した学者の一人であるGerd Theissenは、自身の単著においては「自然奇跡」と「治癒奇跡」を区別なく、いやむしろ統合的に論じる一方、20数年を経たAnnette Merzとの共著では、「一たび彼《イエス》が偉大な一人の奇跡行為者であると見なされれば、風と波に対する神的な力をも彼に帰することは小さな一歩に過ぎなかった。この一歩はイースター後にのみ可能であった。……この物語《イエスの湖上歩行》全体はイースター後にイースターに基づいてのみ可能であったイエスの神的性質への信仰を既に前提としている」と述べ、立場を変更しているように思われる⁸³。

しかし、私見では、このように「自然奇跡」だけを奇跡物語の中から切り分けて、「治癒奇跡」および「悪霊払い」に対するものとは異なる取り扱いをする仕方は、釈義的考察から導出されたというよりも、むしろ現代人のそれぞれの奇跡に対する価値判断、先入観に負うところが大きいように思われる⁸⁴。言

83 単著はTheissen, op. cit.であり、共著の該当箇所はTheissen and Merz, op. cit., p. 295。Ibid., pp. 296, 303-04をも参照。

84 Rawlinson, op. cit., p. 59は「『自然奇跡』と、信仰による癒し及び悪霊払いとを区別し、科学的類比を後者に見る一方、前者を明らかに不可能と見なす現代的傾向は、古代の観点には全く異質である。福音書記者《マルコ》にとって、全て《の奇跡》は等しく奇跡的であり、全て《の奇跡》は等しく可能である。誰が神の力を制限できるだろうか。マルコの観点での奇跡《＝マルコが奇跡と見なしたもの》は、力ある業における神の子の神的性質の顕現であることを証拠立てる高い価値がある。このような諸物語を「自然《普通》の」出来事を大衆向けに誇張したものとして取り扱うことで合理化することは、これらの物語の目的を見損なうことになる」と指摘する。アンダーソン、前掲書、186頁をも参照。なお Martin Dibelius, *From Tradition to Gospel*, translated by Bertram Lee Woolf (*Die Formgeschichte des Evangeliums* 第二版1933より), Cambridge, James Clarke & Co., 1971, pp. 71-72 (邦訳はM. ディベリウス、辻 学監訳、加山宏路・加山久夫・吉田忍訳『福音書の様式史』日本キリスト教団出版局、2022年、84-85頁) のリストから明らかにように、Dibeliusは「治癒奇跡」と「自然奇跡」を区分けせずに論じる。もっともIbid., p. 90 (邦訳107頁) では、「今まで主に治癒奇跡と死者蘇生の物語から『物語Tales』の典型的特徴を取り上げたが、例えば自然奇跡のような他の物語にも、このカテゴリー《＝『物語』》の特別な性質がある」(英語版からの私訳)と述べており、自然奇跡という縛りを意識していない訳ではない。それでも、あくまで論じられていることは、治癒奇跡と自然奇跡とに共通する「物語」の特徴である。

うまでもなく、そもそも釈義的考察は「テキストが何を言おうとしているか」を探求し、その上で「テキストからのメッセージ」を「我々がどう受け取るか」を判断すべきであり、後者の判断の一つの立場（具体的には、現代的な価値判断では「治癒奇跡」および「悪霊払い」に比して「自然奇跡」は起こる可能性が極めて低いと解する立場）を前者に反映させることは方法論的に支持し得ない。

他方で、現代における「自然奇跡」の実績をいくら積み上げたところで、「自然奇跡」が聖書に記されている通りに起こったことの証明にはなり得ない。せいぜい、「現代においても『自然奇跡』が起こり得るのであれば、イエスが『自然奇跡』を行ったとしても不思議ではない」と言い得るに留まるであろう⁸⁵。

6. おわりに

「奇跡物語」の三つのカテゴリーのうち、「自然奇跡」については、二つの点で問題があると思われる。一つには、カテゴリー名とそこに含まれる内容に齟齬があること、もう一つには、「自然奇跡」というカテゴリーに含まれることで「治癒奇跡」や「悪霊払い」よりも歴史的信頼性の低い「奇跡物語」というレッテルを貼られがちであること、である。

そもそも「奇跡物語」は福音書記者がイエスの驚くべき「力ある業」を描こうとするものであるから、現代的な可能性を引き合いにして、その歴史的信頼性に序列をつけることには慎重な姿勢が必要とされるのではないか。

一般に「自然奇跡」に含まれる「奇跡物語」には、「治癒奇跡」や「悪霊払い」ほど、カテゴリー名と内容との間に統一的な繋がりとは認められない。そうであれば、無理に「自然奇跡」という物語群に、これらの「奇跡物語」を押し

85 「自然奇跡」の歴史的信頼性についての積極的な立場からの論述についてはCraig S. Keener, "The Historicity of the Nature Miracles" in *The Nature Miracles of Jesus Problems, Perspective, and Prospects*, Eugene, Wipf and Stock, 2017, pp. 41-65を参照。

込めて、十把一絡げに取り扱うことに拘泥せずとも良いのではなかろうか。むしろ、一旦は「治癒奇跡」、「悪霊払い」、「その他の奇跡」というカテゴリー名（「その他の奇跡」をカテゴリーと呼び得るかについては賛否があろうが）を採用した上で、「その他の奇跡」については、個々の「奇跡物語」の丁寧な釈義によって、その内容と福音書における位置付けを、それぞれ定めることを提案したい。

縷々議論しておいて「その他の奇跡」というカテゴリー名に着地することには異論もあるであろう。それでも、「自然奇跡」というカテゴリー名の呪縛を解くところからこそ、むしろ、従来「自然奇跡」というカテゴリーに押し込められていた個々の「奇跡物語」を適切に解釈し得るのではなかろうか。

こうした意識をもって、従来「自然奇跡」というカテゴリーに含まれていた「奇跡物語」については、個々に、改めて、別の機会に釈義を試みていきたい。